を、まだ完全に達成したとはいえないその理念を諦めることはできません。この腐敗した政治を見て絶望を感じながらも理想を掲げることをやめてはいけないし、命ある限り理想の実現に前進する努力を諦めません」「空気を読んでいては、空気は変わらない。武器を持ち、人を殺す国が普通の国だというなら、私はその普通の国を変えたい」という二つのスピーチを掲載した。

ポスターは電柱などに張り出さず、会員や協力者に届け、その活用はそれぞれの判断に委ねている。

会の活動、運営は、申し合わせ事項の「会の活動は、呼びかけ人の合議、合意で決めます」を逸脱しないようにしている。緊急な活動が必要なこともあるが、その場合も代表の中村興樹さんなどの了解を得て行っている。「合意されないことはしない」ということでもある。

酉須賢一事務局長のがんばりで、事務局会議は月に一回、会のニュースは寺泊では２００部配布。「戦争を語る会・聞く会」の内容は冊子にし、寺泊では３００部普及。

多くの方々と力を合わせ、安倍改憲発議をさせない力……３０００万署名に取り組んでいく決意である。

（やまざき とおる・長岡市寺泊）

１５０年目の北越戊辰戦争を語り継ごう

板橋育夫

祖父が語った北越戊辰戦争

小学生の頃、祖父・龍助から北越戊辰戦争の話を聞いた。その時は気にも留めなかったが、40代を過ぎたころから「祖父のあの話は本当だったのだろうか」と妙に気になっていた。

にいがた

北から南から

明治7年生まれの祖父が慶応4年の戊辰戦争を体験しているわけはないし、私が生まれ育った新潟県中魚沼郡中条村（現十日町市）で、日本の歴史を塗り替えるような大戦争があったとはとても信じられなかった。半信半疑のまま、祖父の話を思い出しながら戊辰戦争の資料を集めるようになった。

祖父の話は次のようなものだった。①中条村の信濃川河原に大勢の武装武士がやってきたこと、②中条村の百姓が動員され、その中の一人に曽祖父の岩蔵がいたこと、③戦争がはじまると、次々と戦死者や負傷者が運び込まれ、陣屋の中は野戦病院となったこと、④貫通銃創に苦しむ兵士の苦痛の声が響きわたったこと、⑤岩蔵がその様子をのぞき込んでいるとき番兵に見つかり追いかけられたこと、⑥村中が「間者がいる」と探索されたこと、⑦岩蔵は家に戻ることができず、山中に逃げ、隠れていたこと。

表3　中条村の人馬駄立（慶応4年6月）

月日	藩	人足	馬	駕籠	備考
		人	疋	挺	
6．2	飯山	6		2	十日町へ1里人足1人分
7	尾州	6		3	〃　銭221文
8	上田	4		早1	〃
11	田ノ口	4		早1	〃
15	松代	35	本馬4		〃　（鉄砲荷）、本馬1疋 1里442文
16	松代	4		早1	〃
16	田ノ口	4		早1	〃
16	上田		軽尻1		〃　（荷物）、軽尻1疋 332文
20	松代	26	本馬5		〃　（荷物）
21	上田		軽尻1		〃　（荷物）
23	松代	4		早1	〃
23	上田	12			上組へ（長持4）
24	上田	14			〃　（長持7）
24	上田	12			〃　（長持3）
25	松代	4		早1	〃
25	松代	2		1	〃
26	上田	12			〃　（長持6）
26	上田	4		早1	〃
29	上田	12			下組へ（長持3）
29	上田	12	本　1		〃　（長持6）
計		177	12	13	

注　田村タニ家文書「御官軍様方馬駄立賃銭留上帳」から作成

魚沼郡は戦場の村と化した

1868（慶応4）年の閏4月、高田に薩摩、長州、加賀、信州11藩の兵など5200人が集結した。20日には長岡城攻めの山道軍1200人が高田を出立し、松代を通り、26日には川西千手村に布陣した。兵500人は信濃川を渡り中条村側に陣を敷いた。兵糧米

や物資の調達が続き、「荷物の運搬などのため十日町と中条でそれぞれ150人の人足が徴発された」「増員された兵士は十日町の宿屋、寺院だけでは収容できず商人のところへも宿泊した」（十日町市史）と記されている。

兵糧米の調達、物資・兵器の運搬、人馬継立（十日町市史）などで平穏な村は一変した。小千谷の朝日山の攻防戦が長引くにつれて、政府軍の援軍が次々と到着し、長岡城が再落城するまでの約95日間、魚沼郡一帯は戦場の村と化した。

両軍合わせて2000人の死者がでる

稲川明雄氏の「北越戊辰戦争資料集」によれば、東・西両軍の戦死者が2千人を超えている。西軍からは薩摩、長州、土州（土佐）、芸州（広島）など、東軍からは長岡、村上、米沢、会津など、70を超える藩兵が越後の大地で血を流した。なぜこんなに多いのか。

1865年、4年間続いたアメリカ南北戦争が終わった。アメリカ史上最大の戦死者（63万人）がでた。この間、銃器の発達は急速に進み、殺傷能力が高まった。ライフル銃、連発銃の開発が戦死者を増やした。3年後に起きた戊辰戦争では、アメリカの南北戦争で不要になった高性能の銃器がどっと流れ込んだ。この最新式の武器が戊辰戦争での戦死者を増やした。武器の優劣が戦場の勝敗を左右したことから、両軍は競って海外の武器を購入した。暗躍した武器商人で最も有名なのはイギリス人の商人・トーマス・グラバーである。長崎にあるグラバー邸は彼の邸宅であった。

武器の購入費用は誰が出したのか

東西両軍は、戦争が長引くにつれて軍資金が不足してくると、侵攻途中の豪商や豪農、村々に割り当て金を課した。

「新発田藩は3月25日、新津組に500両の御用才覚金を課した。桂家が300両、豪農の高橋九之助が200両を用立てた。5月に入ってさらに100両の賦課金が割り当てられた」（新津市史）それぞれの村が分担して

て納入した。

十日町の縮問屋・蕪木八郎右衛門は、松代藩に800両の借用を申し込まれた。400両は納めたが、残りを容赦してほしいと願い出ると、「これは松代藩のものでなく、天朝御用の軍資金である」といわれたという。昔も今も戦争がはじまると軍資金の調達は力ずくで庶民にかぶせられる。

桂家文書「軍事入用急才覚金取り立て帳」

古田新田	29両	5月30日納め
萩道興野	4両2分	5月26日
下興野	6両1分	
北上興野	19両2分	5月27日
七日町村	21両	
市右衛門新田	9両2分	5月28日
天ヶ沢新田	8両	5月26日
鎌倉新田	2両2分	

新発田藩　新津組に100両の軍事御用才覚金の割当て（新津市史）

歴史的大事件を語り継ごう

戊辰戦争は、幕藩体制を崩壊させ、近代国家を誕生させた歴史的大事件である。それが越後の大地で繰り広げられ、県内各地に様々な史跡と痕跡を残している。その有様は、各自治体が編纂した地域史にかなり具体的に記述されている。

残念なことに、それが庶民に語り継がれ、誰でもが知っている状態になっていない。会津若松市に学んで史実を掘り起こし、可視化できるような施設をつくることが大切だ。来年は戊辰戦争150年目である。祖父・龍助が私に語ってくれたように、私たちも、子や孫に歴史を語ることが必要なのではないか。

（いたばし　いくお・新潟市秋葉区）

故郷に戻って45年（下）

橋爪法一

いよいよ最終回となりました。今回は二〇〇五年二月からはじまった市議会議員としての活動について書きます。

私は市議になるときに心に決めていたことがいくつかありました。そのひとつは、私の